

[授業科目名] 小児医学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 福井 義浩
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ ①小児によくみられる疾患であるアレルギー疾患と感染症を取り上げ、緊急時の対処や感染流行に対する危機管理ができるようになるとともに、日常生活の管理や予防を病態生理の面から正しい理解ができるようになる。②子どもの正常な成長を理解し、成長と肥満・痩せの評価ができるようになる。成長の支援、健康の増進や生活習慣病の予防が分かるようになる。③慢性疾患児の学校生活における管理が分かるようになる。④思春期における医学的問題について適切な助言や指導ができるようになる。			
授業の概要 上記の到達目標に示した領域から、毎回、予め与えられた課題（テーマ）を予習し発表する。これを受けて質疑応答を行い、より深い理解に至るよう努める。			
学生に対する評価の方法 毎回の発表内容・質疑応答（40%）と、毎回の授業開始時に前回の授業内容からの小テスト（60%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回【講義】はじめに（子どもの特徴） 第2回【講義】アレルギー総論、気管支喘息 第3回【講義】食物アレルギーとアナフィラキシー 第4回【講義】子どもに多い感染症とその取り扱い（1） 第5回【講義】子どもに多い感染症とその取り扱い（2） 第6回【講義】子どもに多い感染症とその取り扱い（3） 第7回【講義】若年者で問題となる感染症 第8回【講義】食中毒と消化器感染症 第9回【講義】集団生活における感染症への予防と対応 第10回【講義】成長（身体発育）の評価 第11回【講義】肥満と痩せ 第12回【講義】生活習慣病 第13回【講義】小児慢性疾患の管理と指導 第14回【講義】先天異常 第15回【講義】まとめ			
参考書（教科書は特に指定しない） 白木和夫・高田哲「ナースとコメディカルのための小児科学（改訂第4版）」日本小児医事出版社 佐地勉ほか「ナースの小児科学（改訂5版）」中外医学社 内山聖・安次嶺馨「カラー版 現場で役立つ小児救急アトラス」西村書店 鴨下重彦・柳澤正義「こどもの病気の地図帳」講談社 「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」日本学校保健会 宇理須厚雄・近藤直実「食物アレルギー診療ガイドライン2012」協和企画 日本学校保健会「児童生徒等の健康診断マニュアル（平成27年度改訂）」			
自己学習の内容等アドバイス 広く医学・医療・健康などに関する知識を持つことは大事であるが、子どもの発育・発達、病態生理などの基礎知識に裏打ちされた生きた知識の習得を心掛けて欲しい。世の中には医学・健康に関する様々な情報が氾濫しているが、それらに惑わされることのない真偽を見極める力を養って欲しい。			

[授業科目名] 子ども栄養学特論		[授業方法]	[授業担当者名] 藤木 理代
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>子どもの成長と発育を支える栄養を、食べ物・人体・環境の観点から学ぶ。食べ物については、成長期の子どもに必要な食事の内容および食べ方を理解できるようになる。人体については、成長期の身体的特徴・食物アレルギーなどの疾患・運動の役割・適切な生活習慣を理解できるようになる。環境については、子どもの食生活の実態や食育をめぐる家庭および社会状況、支援制度について理解し、子どもの適切な食環境を作るために、家族や社会が果たす役割を理解できるようになる。また、栄養教諭を含む管理栄養士と連携した教育活動を行うために必要な知識や、食育に関する取組みを理解できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人のライフステージの中でも、成長・発達段階にある子どもの栄養問題を考え、教育を行うことは重要である。この授業では、食べ物・人体・環境の観点から、子どもの栄養問題を検討、議論し栄養教育のありかたを学ぶ。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>課題（40%）及びレポート（60%）で評価を行う。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 体を作る食べ物・体を動かす食べ物 第2回 成長・発育に必要な食べ物 第3回 食事と疾患（食物アレルギー） 第4回 食事と疾患（小児メタボリックシンドローム） 第5回 食事と疾患（摂食障害） 第6回 母子栄養の現状と課題 第7回 離乳食の進め方について 第8回 食に関する子育て支援制度について 第9回 子どもの食をめぐる現状と課題 第10回 食育推進（学校給食を通じた食育の意義） 第11回 食育推進（地産地消について） 第12回 食育推進の現状と課題 第13回 体作りと運動（運動によるエネルギー代謝と骨格筋の形成） 第14回 課題発表とディスカッション1 第15回 課題発表とディスカッション2・まとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <p>教科書は使用しない。毎回資料を配布する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>各授業のテーマについて、事前に書籍や Web 検索サイトなどで情報を収集し、現状を把握した上で問題提起を行い授業に臨んで下さい(1 時間程度)。授業後は、疑問に思ったことや、更に探求したい事柄について調べ、学習内容の理解を深めましょう(1 時間程度)。</p>			

[授業科目名] 発達心理学特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 藤井真樹
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>「人が発達するとはどういうことか」について関係発達の観点に基づいて授業を進める。人が関係の中で育つ、ということについて理解し、育てる者に求められる態度について学び、臨床で活かすことができるようになることが到達目標である。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人の発達について、子どもと養育者の映し合う関係を基盤に立ち、その関係のコミュニケーションの諸相をさまざまな事例を通して概観していく。その過程において、「子どもから大人へ」ではなく、「育てられる者が育てる者」になっていくことへの理解を深める。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>各テーマが終わった時点で課題を出す。課題に対してのレポートを提出する。評価する観点は、レポートの内容やまとめ方、さらに感想ではなくより自らに引きつけた観点から理解をできているかに注目して評価する（70%）。また授業への参加活動態度および発表による（30%）。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 「育てる者」になる難しさ 第3回 子どもと養育者の両義性 第4回 「育てられる者」から「育てる者」へ 第5回 ここまでの理解の発表と確認 第6回 乳児期の関係発達 第7回 幼児期の関係発達 第8回 養育の場の両義性 第9回 保育の場の両義性 第10回 ここまでの理解の発表と確認 第11回 障がい児の育つ場の両義性 第12回 コミュニケーションの「障がい」をどう考えるか 第13回 学童期・思春期の関係発達 第14回 青年期後期・成人期前期の関係発達 第15回 ここまでの理解の発表とまとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <p>鯨岡峻「両義性の発達心理学」、ミネルヴァ書房 鯨岡峻「〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ」、ミネルヴァ書房</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>使用教科書に沿って進めるため、事前にしっかり読みこんでおくこと。また、授業での理解を具体的な子どもとの関わりに還元できるような力をつけてほしい。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子どもの福祉特論		講義・演習	石垣儀郎
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ			
<p>本授業の目的は社会福祉学分野における理論と実践の方法論を身につけることである。具体的には理論と研究方法について文献を用いて理解できるようにする。次に、実践・方法論においては受講者が関心のあるテーマの先行研究を分析し、研究課題を設定できるようにする。</p>			
授業の概要			
<p>諸外国における社会福祉の歴史的変遷を概観し、我が国の福祉の現状と課題を考察する。最終的には受講者が社会福祉領域の中から、関心のある分野について研究設定できるように授業を展開する。ディスカッションを通して社会福祉各領域における課題についての検討を行う。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>講義での報告と討議 30%</p> <p>出席状況 20%</p> <p>最終レポート 50%</p>			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
<p>第1回 社会福祉学研究の目的・対象・方法論についての解説 (イントロダクション)</p> <p>第2回 社会福祉学における研究方法</p> <p>第3回 社会福祉学領域の理論研究・児童福祉</p> <p>第4回 社会福祉学領域の理論研究・障害福祉</p> <p>第5回 社会福祉学領域の理論研究・精神保健福祉</p> <p>第6回 社会福祉学領域の理論研究・社会生活 (貧困・格差・ジェンダー) 1</p> <p>第7回 社会福祉学領域の理論研究・社会生活 (貧困・格差・ジェンダー) 2</p> <p>第8回 社会福祉学分野の文献研究 1 (資料収集と分析)</p> <p>第9回 社会福祉学分野の文献研究 2 (ディスカッション)</p> <p>第10回 社会福祉学分野の文献研究 3 (ディスカッション)</p> <p>第11回 社会福祉学分野における歴史研究の位置づけ</p> <p>第12回 社会福祉学分野における先行研究の分析 1</p> <p>第13回 社会福祉学分野における先行研究の分析 2 (ディスカッション)</p> <p>第14回 社会福祉学分野における先行研究の分析 3 (ディスカッション)</p> <p>第15回 全体のまとめ・ディスカッションと最終レポート作成課題</p>			
使用教科書			
<p>受講者と相談したうえで決定する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス			
<p>授業前後に関連する専門書を読んで、関心のあるテーマについて調べる。授業内で関心のあるテーマについてディスカッションできるよう配慮しますので、要望などお伝えください。テーマについての検討や考察を行うためには、少なくとも毎日90分程度の学修時間は必要と思います。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子どもの社会史特論		講義	釜賀 雅史
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ (テーマ)「歴史に見る生活者としての子ども像 ―近世(江戸中期)～昭和期(戦前)の日本を中心として―」 (到達目標) 子どもを取り巻く環境の変化(子どもに注がれる眼差しの変化)と子どもの生活世界の変容を考察することを通して、より深く「子ども」を理解できるようになる。			
授業の概要 生活者としての子どもは、「遊び」「学び」「働く」子どもである。子ども像を歴史的に追究する場合、子どもに向けられるまなざし＝「子ども観」の変遷を基底に置きつつ、この3つの側面の変容過程を考察することになる。ここでは、ヨーロッパにおける子ども観の変遷を念頭に置きつつ、様々な資料と研究を手掛かりに、近世(江戸時代)そして明治～昭和時代(戦前)の日本における生活する子どものありようを追う。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(講義内容への興味関心)40%とレポート 60%(計 100%)で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス(授業の目標、授業計画、運営方法、参考文献などの説明) 第2回 子どもの生活を社会史的に追究することの意味 第3回 資料に見る近世(江戸時代)以前の子ども像 第4回 資料に見る江戸時代の子ども像① 第5回 資料に見る江戸時代の子ども像② 第6回 明治期の日本社会と子ども 第7回 明治期の子どもの生活の風景(子どもにとっての「労働」の位置取り) 第8回 大正～昭和期の日本社会と子ども 第9回 大正～昭和期における子どもに関する言説の考察 第10回 大正～昭和期の子どもの生活の風景 第12回 戦間期の日本社会と子ども 第13回 戦間期の子どもの生活の風景 第14回 これまでのまとめ<戦前の日本における子ども像の変遷> 第15回 更なる学習へのガイダンス			
使用教科書 教科書は使用しない。授業は配布資料・教材にしたがって進める。それぞれ具体的テーマに即してその都度参考図書を紹介する。当講座との関連で一読を薦めたい文献例としては次のものが挙げられる。柴田純『日本幼児史』(吉川弘文館)、江藤恭二監修『子どもの教育の歴史―その生活と社会背景を見つめて―』(名古屋大学出版会)、高橋勝・下田裕彦編著『子どもの<くらし>の社会史』(川島書店)など。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。			

[授業科目名] 子ども文化特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 林 麗子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 子どもと文化の関係を視点にして、子どもという存在について考えることが本授業の目的である。文化を受容し、創造し、文化を介して大人と関わる子どもという存在を理解し、今後の子ども文化の方向性を探ることを通じて、現代文化における子ども観を生成することができる。			
授業の概要 本授業では、遊び、メディア、保育、教育、家庭、地域、絵本や漫画・アニメ、消費活動、社会活動など、現代の子どもを取り巻く様々な文化を取り上げ、その中に生きる子どもの存在のあり様を考えるとともに、これからの子ども文化の方向性について、受講者のディスカッションを通じて模索する。			
学生に対する評価の方法 出席及び討論への参加の積極性と課題の遂行度 50% 講義内容の理解度及び発表・レポート 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 ガイダンス：授業の進め方と評価の方法について 第 2回 「子ども文化」とは何か 第 3回 内外における子ども文化論の理解① 日本を中心として 第 4回 内外における子ども文化論の理解② 欧米を中心として 第 5回 子ども文化① 児童書や絵本から探る子どもの姿 第 6回 子ども文化② 漫画から探る子どもの姿 第 7回 子ども文化③ テレビアニメから探る子どもの姿 第 8回 子ども文化④ 流行する遊びから探る子どもの姿 第 9回 子ども文化⑤ 廃れていく遊びから探る子どもの姿 第 10回 現代社会における子ども文化① 消費社会と子ども 第 11回 現代社会における子ども文化② 親と子の関係における子ども 第 12回 現代社会における子ども文化③ 祖父母と孫の関係における子ども 第 13回 現代社会における子ども文化④ 地域社会における子ども 第 14回 これからの子ども文化の行方 第 15回 授業のまとめ			
使用教科書 特に指定しない。適宜、資料の配布を行い、参考図書を指示する。			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の授業で紹介・提示する文献を読み、各回の授業の内容に関する自己の問題意識を醸成させて授業にのぞむこと。毎回の自己学習時間は 90 分程度と考えている。			

[授業科目名] 多文化共生教育特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 宮川 公平
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>近年、多文化共生という言葉が多く聞かれるようになってきている。その背景には、コロナ禍以前から在留外国人が増加の一途をたどり、多くの自治体で多文化共生政策を打ち出すようになってきていることがあげられる。外国人が集住する地域においては以前から多文化共生のための事業を打ち出し、特に教育現場ははやくから外国にルーツを子どもたちの受入れの政策を採用しているものの、子どもたちの間の教育格差が課題として指摘されている。ここでは、日本におけるニューカマーに注目し、地域の多文化化の現状と課題を理解するとともに、外国にルーツをもつ子どもたちに対する支援のあり方について考える。また、適宜、歴史的な文脈における在日コリアン、中国人、台湾人、そしてアイヌ民族や琉球民族についても触れていく。 (「思考力・判断力・表現力等」◎、「学びに向かう力・人間性等」○)</p>			
<p>授業の概要</p> <p>毎週ごとのトピックに対して、ディスカッションを含め授業内での発話が求められます。受講生は、他者と話し合うため、トピックについての自身の意見をまとめておくなど準備ができていることが求められます。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>ディスカッション・発話を含む授業参加 40%、最終レポート 30%、発表 30%</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 多文化主義と多文化教育 第3回 日本における多文化共生 第4回 日本の外国人が抱える問題 第5回 地域社会と多文化共生 第6回 多文化共生のための教育：人権教育と世界市民教育 第7回 教室のなかの多文化共生：外国につながる子どもたちへの対応 第8回 地域日本語教育とコーディネーター 第9回 日本語教育事例：中津川市における日本語教室の実践 第10回 国際結婚と法～国籍に関する日本の法律を含め～ 第11回 国際結婚家族とバイリンガル 第12回 共存から共生へ 第13回 ディスカッション：各自の研究テーマの要約比較 第14回 レポート発表 第15回 授業のまとめとレポート提出</p>			
<p>使用教科書</p> <p>必要に応じて文献・資料を配布する</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>事前学習として指定された文献や自己調べなど 90 分、事後学習として 90 分 合計 180 分が求められる。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子どもケアフィールドワーク		演習	指導教員
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
4	選択	日進市内の保育所、小学校、中学校、附属幼稚園、学部付設子どもケアセンターにおける実践的研究	
授業の到達目標及びテーマ			
各専門分野のフィールド研究の方法論を深く学びながら、院生各自の研究テーマを位置づけることで、新たなフィールド研究の方向性を見出す。			
授業の概要			
<p>修士論文に結びつく課題研究を前提に、本研究科の教育課程を構成する応用研究の5領域毎に、院生一人ひとりが思考する分野の実証、実践的な研究の場として、当該研究科が設置される日進市の中学校、小学校、幼稚園、保育所、医療機関、児童施設及び子育て支援組織等で、実践的・臨床的研究を行う。</p> <p>また、各フィールドにおいて初等教育の臨床的経験・調査、幼児教育における環境構成・児童文化、児童相談の専門的援助活動の現状と課題、医療機関における保育士の必要性などのフィールドで観察を行う。これらの体験を通して、子どものリアルな姿を把握し、子どもケアの実際を理解するとともに、各自の研究課題を探索的に発見することを目指す。発達臨床の立場による乳幼児期の遊びの観察、統合保育・教育の実際、児童への学級や保健室での支援、小中学生における学校カウンセリング・心理療法の実際・虐待等に対する子どもケアセンターの相談の内実や相談の過程を取り上げる中で、院生一人ひとりの子どもケアの在り方について考察する。</p>			
学生に対する評価の方法			
授業中の活動度(40%)、レポート(30%)、フィールドワーク先からの評価(30%)により総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等)			
第1～3回 フィールドワーク先の決定及び研究課題の設定			
第4回～第14回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修並びにレポート等の発表と検討			
第15回 フィールドワークについてのまとめ			
使用教科書			
参考文献:ヒューマンケアを考えるーさまざまな領域からみる子ども学ー 井形昭弘編著			
自己学習の内容等アドバイス			
フィールドワーク先における現状について理解を深めるとともに、諸問題についても自分なり意見が見いだせるよう、積極的に取り組むこと。			

[授業科目名] アカデミック・ライティング		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 齋藤芳子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考] 初回～第2回の授業で受講者と意見交換をしたうえで、確定版かつ詳細なシラバスを授業中に配布します	
授業の到達目標及びテーマ 受講者のアカデミック・ライティング技能向上を目的とする授業です。アカデミック・ライティングとは学術的な著述のことです。著述プロセスの各段階における具体的なノウハウを理解すること、ノウハウを適用して著述の修正ができること、責任を持って自分の著述を仕上げられることを到達目標とします。アカデミック・ライティングに対する漠然とした苦手意識や戸惑いを解きほぐしていきましょう。			
授業の概要 アカデミック・ライティングには、形式や作法、問いの設定、文献探索、調査・開発、論理構成、文章表現、研究倫理といった様々な要素があります。受講者には、これらの要素を授業中のミニワークや最終レポート作成を通じて会得し、修士論文作成に役立てることが期待されます。また、意見を出し合うなど受講生間で学びを深めてもらいたいと考えています。			
学生に対する評価の方法 ミニワーク（70%）＋最終レポート（30%）、 最終レポートの提出がない場合は「E 不合格（再評価を実施できないもの）」。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 インTRODクシヨN：アカデミック・ライティングとは何か 第2回 論文の型 第3回 論理と論証 第4回 問いをたてる 第5回 アウトラインをつくる 第6回 先行文献を探索する 第7回 クリティカル・リーディング 第8回 調査の設計から実施まで（1）量的調査 第9回 調査の設計から実施まで（2）質的調査 第10回 論文における文章と図表 第11回 引用と参照 第12回 アウトラインを充実させる 第13回 論文として整形する 第14回 要旨を書く 第15回 修士論文までを見通す			
使用教科書 教科書は指定せず、適宜資料を Moodle に掲載します。以下は参考になる書籍です。 <ul style="list-style-type: none"> ● 井下千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法』（第2版）慶應義塾大学出版会。 ● 上野千鶴子（2018）『情報生産者になる』ちくま新書。 ● 小熊英二（2022）『基礎からわかる論文の書き方』講談社現代新書。 ● 河野哲也（2018）『レポート・論文の書き方入門』（第4版）慶應義塾大学出版会。 ● 木下是雄（1981）『理科系の作文技術』中公新書。 ● 佐渡島紗織・吉野亜矢子（2021）『これから研究を書くひとのためのガイドブック：ライティングの挑戦 15 週間 第2版』ひつじ書房。 ● 戸田山和久（2022）『最新版 論文の教室－レポートから卒論まで』日本放送出版協会。 ● 西山聖久（2019）『最短ルートで迷子にならない！理工系の英語論文執筆講座』化学同人。 			
自己学習の内容等アドバイス 授業時間外に各回宿題（約 120 分）と Moodle 掲載資料を用いた事前学習（約 60 分）に取り組んでください。			

[授業科目名] 幼児教育特論 I		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 津金 美智子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本授業では、幼児期の教育について、文献及び、文部科学省での中央教育審議会、経済財政運営と改革の基本方針 2022(骨太の方針)等、最新情報を通して、ディスカッションを行い、理解を深める。</p> <p>【到達目標】① 幼児期の教育の不易、及び課題に関する最新情報を基に議論できるようになる。 ② ①を通して適切な研究課題を明確にもつことができるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本授業は、幼児期の教育に関するテーマを設定し、それに関する文献等の輪読を行い、テーマに基づく先行研究の知見を広めると共に、最新の審議会情報等を通して、課題を明確にする。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>各回における授業への姿勢と最終レポートにより評価する。(授業姿勢 20% レポート 80%)</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>第1回 講義 オリエンテーション 授業の概要 目的 テーマの設定について 第2回 講義・演習 幼児教育の基本 目的及び目標 重視すべき事項 第3回 講義・演習 環境を通して行う教育 幼児期の見方・考え方について 第4回 講義・演習 社会に開かれた教育課程 第5回 講義・演習 カリキュラム・マネジメント 第6回 講義・演習 学校教育全体で育成すべき資質・能力 幼児教育に育みたい資質・能力 第7回 講義・演習 主体的・対話的で深い学び 第8回 講義・演習 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 第9回 講義・演習 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続 第10回 講義・演習 幼保小の架け橋プログラム 第11回 講義・演習 次期教育振興基本計画等、中央教育審議会審議関連資料に基づく最新情報 第12回 演習 テーマに基づく発表 第13回 演習 テーマに基づく議論 第14回 演習 テーマに基づくまとめ 第15回 演習 総合討議</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特になし。 適時、資料等を提示する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>事前に資料等を熟読し、理解を深めるとともに、授業後に研究テーマとの関連を通して」まとめる。 (各週 3 時間)</p>			

[授業科目名] 幼児教育特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 津金 美智子																																																																											
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]																																																																												
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本授業では、幼児教育学特論Ⅰの学習成果を踏まえて、幼児教育の不易と現代的な課題について具体的に把握し、幼児期の子供の理解を通して発達や学びの姿を分析する。</p> <p>【到達目標】① 幼児の観察記録を通して、幼児の発達や学びの姿を分析できるようになる。 ② ①を通して、研究テーマについて具体的な実践を根拠に検証できるようになる。</p>																																																																														
<p>授業の概要</p> <p>本授業は、設定した幼児期の教育に関するテーマに基づき、幼児の遊びや生活を観察し、その分析を通して省察する。</p>																																																																														
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>各回における授業への姿勢と最終レポートにより評価する。(授業姿勢 20% レポート 80%)</p>																																																																														
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>講義</td> <td>オリエンテーション</td> <td>授業の概要</td> <td>目的</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>講義・演習</td> <td colspan="3">観察の視点と記録の方法</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">内面理解</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">幼児期の終わりまでに育ってほしい姿からの分析</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">幼児期に育みたい資質・能力の視点からの分析</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">遊びを通して育まれることについて</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">主体的・対話的で深い学びの視点からの分析</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">小学校教育における各教科等とのつながり</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">体験の多様性と関連性</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">発達や学びの連続性について</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> <td>講義・演習</td> <td>記録を通した読み取り</td> <td colspan="2">小学校教育との円滑な接続からの分析</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> <td>演習</td> <td colspan="3">テーマに基づく検証</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> <td>演習</td> <td colspan="3">テーマに基づく議論</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> <td>演習</td> <td colspan="3">テーマに基づくまとめ</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>演習</td> <td colspan="3">総合討議</td> </tr> </table>				第1回	講義	オリエンテーション	授業の概要	目的	第2回	講義・演習	観察の視点と記録の方法			第3回	講義・演習	記録を通した読み取り	内面理解		第4回	講義・演習	記録を通した読み取り	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿からの分析		第5回	講義・演習	記録を通した読み取り	幼児期に育みたい資質・能力の視点からの分析		第6回	講義・演習	記録を通した読み取り	遊びを通して育まれることについて		第7回	講義・演習	記録を通した読み取り	主体的・対話的で深い学びの視点からの分析		第8回	講義・演習	記録を通した読み取り	小学校教育における各教科等とのつながり		第9回	講義・演習	記録を通した読み取り	体験の多様性と関連性		第10回	講義・演習	記録を通した読み取り	発達や学びの連続性について		第11回	講義・演習	記録を通した読み取り	小学校教育との円滑な接続からの分析		第12回	演習	テーマに基づく検証			第13回	演習	テーマに基づく議論			第14回	演習	テーマに基づくまとめ			第15回	演習	総合討議		
第1回	講義	オリエンテーション	授業の概要	目的																																																																										
第2回	講義・演習	観察の視点と記録の方法																																																																												
第3回	講義・演習	記録を通した読み取り	内面理解																																																																											
第4回	講義・演習	記録を通した読み取り	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿からの分析																																																																											
第5回	講義・演習	記録を通した読み取り	幼児期に育みたい資質・能力の視点からの分析																																																																											
第6回	講義・演習	記録を通した読み取り	遊びを通して育まれることについて																																																																											
第7回	講義・演習	記録を通した読み取り	主体的・対話的で深い学びの視点からの分析																																																																											
第8回	講義・演習	記録を通した読み取り	小学校教育における各教科等とのつながり																																																																											
第9回	講義・演習	記録を通した読み取り	体験の多様性と関連性																																																																											
第10回	講義・演習	記録を通した読み取り	発達や学びの連続性について																																																																											
第11回	講義・演習	記録を通した読み取り	小学校教育との円滑な接続からの分析																																																																											
第12回	演習	テーマに基づく検証																																																																												
第13回	演習	テーマに基づく議論																																																																												
第14回	演習	テーマに基づくまとめ																																																																												
第15回	演習	総合討議																																																																												
<p>使用教科書</p> <p>特になし。 適時、資料等を提示する。</p>																																																																														
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>事前に観察記録をまとめ、読み取り、及び、授業テーマに沿った分析を行い、研究テーマとの関連を通して省察を行う。 (各週3時間)</p>																																																																														

[授業科目名] 保育内容特論 I		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 渡辺 桜
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業では、「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」について学ぶために、保育内容における「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性を理解することが到達目標である。			
授業の概要 保育における「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」にかかわる文献や先行研究を読み込みながら、保育内容との関連を討論していく。			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を合算して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 乳幼児期の保育内容における「環境」の必要性（講義） 第2回 「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性とは（講義） 第3回 乳児期の「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性（講義） 第4回 幼児期の「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性（講義） 第5回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」とは（講義） 第6回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(乳児) ビデオ視聴またはフィールドワーク（演習） 第7回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(乳児)の振り返り（演習） 第8回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(幼児) ビデオ視聴またはフィールドワーク（演習） 第9回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(幼児)の振り返り（演習） 第10回 保育の場における保育者の育ち（演習） 第11回 「対話」が支える子ども・保育者・保護者の育ちあい（演習） 第12回 「対話」とは何か（演習） 第13回 保育の質の向上を目指す研修のあり方（講義） 第14回 保育の質の向上を目指す研修の実際 フィールドワーク（演習） 第15回 まとめ（演習）			
使用教科書 その都度指定する			
自己学習の内容等アドバイス 保育における「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」にかかわる文献や先行研究より、保育内容における「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性を分析しておきましょう。1時間程度。			

[授業科目名] 保育内容特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 渡辺 桜
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業では、保育内容特論Ⅰを踏まえて、保育内容の核となる遊びに関連した文献や園での遊びの実践事例を参考にしながら、『遊び』を通しての教育』という理念についての理解することが到達目標である。			
授業の概要 特論Ⅰで理解を深めた「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」について、実際の保育現場でのフィールドワークを基に具体的に分析・考察する。			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を合算して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回【講義】保育における「物的環境」「空間的環境」「人的環境」とは何か 第2回【講義】物的環境に関する先行研究の分析 第3回【講義】空間的環境に関する先行研究の分析 第4回【講義】人的環境に関する先行研究の分析 第5回【講義】「子どもの主体性」のみに着目することの危険性 第6回【演習】「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(大規模園) ビデオ視聴またはフィールドワーク 第7回【演習】「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(大規模園) 振り返り 第8回【演習】「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(小規模園・異年齢保育) ビデオ視聴またはフィールドワーク 第9回【演習】「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(小規模園・異年齢保育)振り返り 第10回【演習】「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(インクルーシブ保育) ビデオ視聴またはフィールドワーク 第11回【演習】「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(インクルーシブ保育)振り返り 第12回【講義】「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」を踏まえた子育て支援 第13回【演習】「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」を踏まえた子育て支援の可能性 第14回【演習】保育の質の向上を目指す職場風土の実際 フィールドワーク 第15回【演習】まとめ			
使用教科書 その都度指定する			
自己学習の内容等アドバイス 保育における「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」にかかわる実践事例や保育者の語りより、保育内容における「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性を分析しておきましょう。1時間程度。			

[授業科目名] 保育内容研究演習 A		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 藤井 真樹
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 人間の発達過程を他者との関係性の変容として捉える「関係発達」の理論の考え方・原理、およびその観点から保育内容を考えていくことができるようになることが到達目標である。特に領域「人間関係」を中心に、関係発達論の立場を理解し、自らの研究領域をあらためて問い直すことにより、研究課題への新たな示唆を得ることを目的とする。			
授業の概要 鯨岡峻著『ひとがひとをわかるということ』をテキストにそれを各章ごとに読み込みながら、関係発達論への理解を深める。並行して自らの研究領域の文献講読の発表を行い、関係発達論からの新しい手がかりを得る。			
学生に対する評価の方法 発表を含めた授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 第2回 関係発達論への導入 第3回 関係発達論とは（1）両義性 第4回 関係発達論とは（2）間主観性・間身体性 第5回 関係発達論とは（3）相互主体性 第6回 ひとがひとをわかることとは 第7回 他者を理解することと他者と「共にある」こと 第8回 大人が子どもを理解することとは 第9回 「主体である」とはどういうことか：子どもが主体であることの意味 第10回 相互主体性の観点から「育てる」ということを考える（1）主体としての二面性 第11回 相互主体性の観点から「育てる」ということを考える（2）心の育ちへの定位 第12回 乳児期の相互主体的な関係を事例から考える 第13回 幼児期の相互主体的な関係を事例から考える 第14回 自らの研究領域への関係発達論からの問い直し 第15回 まとめ			
使用教科書 鯨岡峻著『ひとがひとをわかるということ：間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房 藤井真樹著『他者と共にあるとはどういうことか』ミネルヴァ書房 その他、適宜必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 事前にレジュメを作成しそれに基づき毎回報告する。 テキストをよく読み、疑問点などをまとめておくようにしてください。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
保育内容研究演習B		演習	藤井 真樹
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ エピソード記述やインタビュー、当事者研究といった様々な「質的研究」にあたることを通して、人間科学における「質的研究」の意義を学び、実践者としてと同時に日常を生きる1人の当事者として他者を理解することについての理解を深める。			
授業の概要 質的研究の手法を学ぶと同時に、『接面を生きる人間学』（鯨岡峻・大倉得史著）に収録されている論考を熟読し、他者理解への洞察を深める。特に他者との関わりにおける『接面』というパラダイムの必要性について、従来の客観主義的研究との比較に基づいて理解することを目指す。			
学生に対する評価の方法 発表を含めた授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 第2回 人間科学における「質的研究」の実際（1）観察及びその様々な記録法 第3回 人間科学における「質的研究」の実際（2）インタビュー法 第4回 人間科学における「質的研究」の実際（3）当事者研究 第5回 「保育する」営みを再考する：「接面の人間学」への入り口 第6回 心の動きへの洞察と接面概念 第7回 保育におけるエピソード記述の必要性（1）：接面へのアプローチ 第8回 保育におけるエピソード記述の必要性（2）：エピソード記述の共有 第9回 接面から考える特別支援教育のかたち 第10回 接面が立ち上がるときーある具体的なエピソードから 第11回 トランスジェンダー当事者同士の「語り合い」によって生まれた接面 第12回 盲ろう者とコミュニケーション 第13回 関係発達論的な音楽療法における接面 第14回 他者と「共に生きる」とはどういうことか 第15回 まとめ			
使用教科書 鯨岡峻著『接面を生きる人間学』ミネルヴァ書房 鯨岡峻著『子どもの心を育てる新保育論のために』ミネルヴァ書房 大塚類・遠藤野ゆり編著『エピソード教育臨床』創元社、等 その他、適宜必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 事前に指示した次回授業内容についてしっかり予習をし、理解を深めてから受講する。			

[授業科目名] 初等教育特論 I		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 青木 一起
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>(テーマ) 生徒指導及び授業の内容、方法等に求められる不易と流行。 (到達目標) 現代の教育課題を視野に入れながら、児童の指導や授業を構成する各教科についての調査及び分析を行う。また、課題解決に向けた教材化を図るとともに、明確な課題意識を醸成し、総合的な実践力を身に付けることができるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>学習指導要領及びその背景となる現在の社会的背景や生徒指導の在り方をとらえながら、各教科の教科内容と指導法などを文献研究等により検討していく。また、その結果を踏まえ、新しい教材や単元を提案し分析を行う。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>授業への参画態度 40%レポート 60%で評価する。</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>第 1 回 オリエンテーション ―授業の概要説明等― 第 2 回 子どもの発達と教育学研究からみた小学校教育の今日的課題 第 3 回 学習指導要領 (小学校) 編の批判的検討 第 4 回 教育改革の動向と小学校の授業改善の方向性 (含: G I G A スクール構想) 第 5 回 生徒指導・教育相談の機能を生かした学級経営の理論と実際 第 6 回 学習指導論特講 (初等教育の内容と方法・教材論) 第 7 回 特別支援教育と学校組織マネジメント 第 8 回 初等国語科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 9 回 初等算数科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 10 回 初等社会科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 11 回 初等理解・生活科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 12 回 初等音楽科・図工科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 13 回 初等家庭科・体育科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 14 回 道徳・外国語活動・特別活動における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 15 回 まとめと初等教育特論 II に向けた課題設定</p>			
<p>使用教科書</p> <p>小学校学習指導要領 (平成 2 9 年告示) 文科省</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>各教科の指導法の学問研究の動向を調査しておく (1 2 0 分) これまでに作成した各教科の学習指導案や模擬授業の理論的背景を明確にし、考察しておく (1 2 0 分)</p>			

[授業科目名] 初等教育特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 青木 一起
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>(テーマ) 理論と実践との往還 (到達目標) 初等教育特論Ⅰを踏まえ、初等教育の自ら選んだ教科に焦点をあて専門研究の対象とし、深い学問研究と高い教育的実践力の融和を目指して、授業研究における理論と実践との往還について、広い視野から考察することのできる資質・能力を育むことができるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>院生の研究課題およびその背景にある研究動向を、初等教育における各教科内容研究の視点と関連付けながら捉え直すとともに、その知見を実際の授業づくりにおける教材開発に適用する試みを通すことによって、理論と実践との関連性について考察する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>授業への参画態度 40% 課題研究レポート 60%で評価する。</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>第 1 回 オリエンテーション —授業の概要説明等— 第 2 回 教育経営学の研究動向 (学校組織マネジメント) 第 3 回 教育研究のための質的研究 (量的アプローチと質的アプローチ) 第 4 回 授業という営み「主体的に学ぶとは」(含: ICT活用の理論と実践) 第 5 回 学力調査の分析からみる授業研究の在り方と課題 (研究教科) の設定 第 6 回 研究教科の教材・授業の先行研究の調査① 第 7 回 研究教科の教材・授業の先行研究の調査② 第 8 回 研究教科の教材・授業の先行研究の検討 第 9 回 研究教科の教材・授業研究の課題設定 第 10 回 研究教科の教材・授業研究の課題検討① 第 11 回 研究教科の教材・授業研究の課題検討② 第 12 回 研究教科の教材・授業研究の実践 第 13 回 研究の成果と課題 (授業分析の理論と方法) 第 14 回 授業記録作成と報告書作成 第 15 回 まとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特に指定せず。自らの研究内容に沿って選択する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>自らの課題意識による専門教科及び領域を選択し、事前に調査・検討をしておく (120分)</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
児童の表現文化特論 A		講義・演習	林 麗子
[単位数]	[必修・選択]	備考	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 子ども達の表現行動の中で主として動作や身振りまたそのリズム特性から、幼児・児童期の子ども達の表現を理解する。また、戦後教育における身体表現の意味づけを通して、時代の大人たちの教育観や期待を理解する。さらに、子ども達の身体表現の現在と今後の展望について論じることができる。			
授業の概要 子ども達の表現行動の中で主として動作や身振りまたそのリズム特性に関する文献を抄読する。また、戦後教育における身体表現の内容を概観し、時代の大人たちの教育観や期待を探る。さらに、子ども達の身体表現の「今」について、文献・資料を収集するとともに、実際の教育現場に赴き、最終レポートにおいて、各自課題を設定し、総括的に考察する。			
学生に対する評価の方法 授業内でのやり取り（30%）および最終レポート（40%）において講義内容の理解度、子ども達の表現に対する興味や関心、及び研究的視点の有無を評価し、授業への参加態度（30%）を加味して総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回【講義】ガイダンス（授業の概要と目的、スケジュール、評価、教科書・文献の紹介など） 第2回【講義】幼・児童期の発育発達に伴う表現特性（言葉・動作・リズム・音楽や絵画表現）について これまでに得た知識や体験の確認 第3回【講義】「子ども文化の原像」の第2章の講読、考察と意見交換 第4回【演習】主として身体的表現に焦点をあて、幼・児童期の表現特性について文献の抄読 ① 幼児・児童期の自然な表出動作とそのリズム特性 第5回【演習】前回の文献の考察と意見交換 第6回【演習】主として身体的表現に焦点をあて、幼・児童期の表現特性について文献抄読・講述 ② 幼児・児童期の対人コミュニケーション動作・身振り特性 第7回【演習】前回の文献の考察と意見交換 第8回【演習】戦後の幼児教育における身体リズム表現領域の内容（幼稚園教育要領の変遷を概観） 第9回【講義】戦後の児童（小学校）教育におけるダンス表現領域の内容（体育科指導要領の変遷を概観） 第10回【講義】想像的（創作を含む）表現とフォークダンスや現代的リズムのダンスなどの型のある表現の 教育的意味について 第11回【演習】幼稚園や小学校の遊戯会、運動会の見学 第12回【演習】見学・インタビューに対する意見交換と各自のまとめレポート 第13回【演習】子どもたちのからだ表現の今 ― 課題とテーマ決定 第14回【演習】各自の課題テーマに沿って、レポートとプレゼンテーション 第15回【講義】授業のまとめ			
使用教科書 ① 岩田慶治編：子ども文化の原像、日本放送協会、1985 ② 野村・市川編：「技術としての身体」、叢書身体と文化より、大修館書店、1999 ③ 菅原・野村：「コミュニケーションとしての身体」叢書身体文化より、大修館書店、1996			
自己学習の内容等アドバイス 教科書の内容理解からさらに他の資料へ関心を広げ、各自で文献収集ができるとうい。 身近な乳幼児の身振りやしぐさ、乳幼児を取り巻く大人とのコミュニケーションなど、日頃から興味を持って観察できるとよい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
児童の表現文化特論 B		講義・演習	岡田 暁子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>乳幼児・児童期の発達を関連付けながら、音・音楽との関わりについて理解し、音・音楽を視点とした表現の芽生えやプロセスについて、検討、考察することができる。また、保育・教育等の活動事例や地域の取り組み等から、文化としての音楽への誘いや教育としての音楽の意義について自身の考えをもつことができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>文献の輪読をとおして、独創的かつ学際的な視点から子どもと音・音楽の多用な関わりとその意義について、ディスカッションしながら理解を深めていく。また、地域や教育現場の取り組みの見学などのフィールドワークを行い、文化としての音楽と子どもの育ち、音楽教育の在り方について考える。授業での取り組みを振り返り、自身で設定したテーマに沿って最終レポートを作成する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>レポート (30%)、提出物 (20%)、ディスカッションや発表の内容 (30%)、授業への参画態度 (20%) など総合的に評価する。</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>第1回 ガイダンス (授業のテーマ、概要、方法、見通し、参考図書を紹介など)</p> <p>第2回 輪読(1) 第1章 音楽性：生きることの生気と意味の交流※</p> <p>第3回 輪読(2) 第2部 乳児期における音楽性 [序文]、第9章 乳児のリズム：音楽的コンパニオンシップの表現※</p> <p>第4回 輪読(1)(2)のまとめ</p> <p>第5回 輪読(3) 第4部 子どもの学びにおける音楽性 [序文]、第20章 話すことと聴くことにおける音楽性：学びの環境としての教室談話の鍵※</p> <p>第6回 輪読(4) 第5部 演奏行為における音楽性 [序文]、第26章 音楽的なコミュニケーション：演奏における身体の動き※</p> <p>第7回 輪読(3)(4)のまとめ</p> <p>第8回 フィールドワーク(1) 見学</p> <p>第9回 フィールドワーク(2) 調査</p> <p>第10回 フィールドワークの振り返り、ディスカッション</p> <p>第11回 フィールドワークの考察、まとめレポート</p> <p>第12回 レポートテーマの設定</p> <p>第13回 レポートの進捗報告 (先行研究やデータについて)</p> <p>第14回 レポートの進捗報告 (意見交換)</p> <p>第15回 レポート内容の発表、まとめ</p> <p>※輪読の内容は、すべて『絆の音楽性 つながりの基盤を求めて』(音楽之友社、2018)からの抜粋である。</p>			
<p>使用教科書</p> <p>随時プリントを配布する。</p> <p>参考書：S.マロック、C.トレバーセン編『絆の音楽性 つながりの基盤を求めて』音楽之友社、2018</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>輪読する文献を事前に読む。また、まとめの回に向けて、関連する事例を調べるなどしてノートにまとめる。また、プレゼンテーションやレポート作成の準備を行う。(週1時間程度)</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校保健学特論A		講義・演習	酒井 多香子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 本講義においては、学校保健の3領域（保健教育、保健管理、保健組織活動）それぞれが相互に関連を持たせた総合的な取組に成っているか、現場の養護教諭の実際の活動から検討する。また、子どもの健康に関わる法令から現在の学校保健活動で注視したい課題を理解する。最終的には、学校保健活動を計画・実施・評価・改善（PDCA）を適切に行うことができるようになる。			
授業の概要 学校現場との接点を大切にしながら、現場の抱える問題を分析し、より適切な学校保健活動が展開できるように授業を進めていく。授業は講義形式で行う。また、課題研究（レポート）を課す回もある。この課題研究は、講義の内容に基づいて提出を義務づける。			
学生に対する評価の方法 討議10%、課題研究（レポート）40%、小論文50%によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回【講義】 授業のオリエンテーション 授業の目的、講義内容の概要の説明 第2回【講義】 学校教育と学校保健 学校保健計画の作成手順 第3回【講義】 学校保健活動の実態①（保健管理領域）心身の健康管理編 第4回【講義】 学校保健活動の実態②（保健管理領域）学校生活の管理・学校環境衛生の管理編 第5回【講義】 学校保健活動の実態③（保健教育領域）教科保健・関連教科編 第6回【講義】 学校保健活動の実態④（保健教育領域）道徳科・特別活動・総合的な学習の時間編 第7回【講義】 学校保健活動の実態⑤（保健組織活動）学校保健委員会・地域学校保健委員会編等 第8回【演習】 子どもの健康実態把握の仕方についての検討 第9回【講義】 子どもの健康に関わる法令 第10回【講義】 健康教育の動向① コロナ禍における歯と口の教育 第11回【講義】 健康教育の動向② 安全教育 第12回【講義】 健康教育の動向③ 性教育・エイズ教育 第13回【演習】 学校保健活動の評価のあり方についての検討 第14回【講義】 これからの学校保健活動の進め方 第15回【講義】 まとめ、小論文提出			
使用教科書 テキストは使用しない。授業中にプリントを配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 学校保健活動は幅広い領域に及んでおり、運営にはさまざまな職種の人たちが担っている。子どもの健康課題を解決するにはどの領域も重要であり、また相互に関連している。養護教諭はその中核的な存在であり、より効果的に学校保健活動を実施するにはどうしたらよいか問題意識をもって講義に臨んでほしい。			

[授業科目名] 学校保健学特論B		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業においては、学校保健の領域の中でも保健教育に着目し、養護教諭が行う教科保健、特別活動、総合的な学習の時間等の効果的な進め方について事例を通して検討し、実際に指導案・使用する資料等を作成する。また同時に、学校保健に関わるさまざまな職種の人々が協力し合って、どう子どもたちに働きかけたらよいかについても検討する。			
授業の概要 特論で学習した内容を踏まえ、幅広い学校保健活動（とりわけ保健教育の領域について）をスムーズに進めていくための具体的な方法について検討する。通常は、模擬授業や指導案・資料作成などの演習を行いながら学校保健活動全般について理解を深めていく。また、課題研究（レポート）を課す回もあるので、準備すること。			
学生に対する評価の方法 討議10%、課題研究（指導案・レポート）40%、作成した教材・指導案50%によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回【演習】 学校における健康教育 第2回【演習】 健康教育の基盤となる学習理論① 健康信念モデル、自己効力感 第3回【演習】 健康教育の基盤となる学習理論② 変化のステージ、計画的行動理論、ストレス対処 第4回【演習】 健康教育の基盤となる学習理論③ 社会的支援、コントロール所在 第5回【演習】 効果的な保健教育のあり方の検討（学習理論の応用）① 学級活動で 第6回【演習】 効果的な保健教育のあり方の検討（学習理論の応用）② 集団や個別の指導で 第7回【演習】 効果的な保健教育のあり方の検討（学習理論の応用）③ 学校行事で 第8回【演習】 地域の医療機関等との連携のあり方 第9回【演習】 児童生徒保健委員会 学校保健委員会のあり方 第10回【演習】 保健教育の進め方①「感染症・食中毒の予防と対応」 指導案・教材（1） 第11回【演習】 保健教育の進め方②「健康状態評価」等 指導案・教材（2） 第12回【演習】 保健教育の進め方③「障害や疾病等のある子どもの管理」等 指導案・教材（3） 第13回【演習】 保健教育の進め方④「学校環境衛生検査」等 指導案教材（4） 第14回【演習】 保健教育の進め方⑤ その他 指導案・教材（5） 第15回【講義】 まとめ 小論文提出			
使用教科書 テキストは使用しない。授業中にプリントを配付する。			
自己学習の内容等アドバイス より効果的な学校保健活動を進めるには、前年度の取組を理論に基づいて評価し計画を立てる必要がある。本演習第1～4回で学習理論について扱うので十分に復習して理解すること。その上で幅広い学校保健活動の中で具体的にどんな学習理論と評価を用いているのか検証する。			

[授業科目名] 健康教育学特論 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 学校における健康教育の概念、保健教育の進め方、多様な指導方法およびそれらを支える理論について理解することができるようになる。			
授業の概要 本特論は、学校における健康教育の基本的な考え方、ヘルスポモーション（ヘルスポモーションスクール）について理解を深めるとともに、保健教育、保健管理、保健組織活動のそれぞれの分野の関連性や理論に基づいた多様な指導方法について総合的に理解する。			
学生に対する評価の方法 ・授業態度（課題レポートの提出、討議等）50% ・試験 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回【講義】 オリエンテーション 授業の目的、講義内容の概要の説明、進め方についての説明 第 2 回【講義】 健康教育の基本的な考え方、学校における健康教育の法的根拠（関係法規の概要） 第 3 回【講義】 ヘルスポモーションスクール、学校におけるヘルスポモーションの進め方 第 4 回【講義】 教科保健、他の教科における健康教育に関する学習指導要領の指導内容 第 5 回【講義】 特別活動における保健指導計画の立案・実施・評価方法 第 6 回【講義】 健康観察、健康相談及び保健指導における学校保健安全法の理解 第 7 回【講義】 保健組織活動における健康教育（学校・家庭・地域との連携） ➡目的、運営及び指導方法、組織マネジメント 第 8 回【講義】 児童生徒の心身の健康問題への対応① アレルギー、肥満 第 9 回【講義】 児童生徒の心身の健康問題への対応② メンタルヘルス 第 10 回【講義】 児童生徒の心身の健康問題への対応③ 喫煙、飲酒、薬物乱用 第 11 回【講義】 学校における健康教育の進め方① 学校保健計画、学校安全計画 第 12 回【講義】 学校における健康教育の進め方② 保健室経営計画等 第 13 回【講義】 海外における健康教育の動向 第 14 回【講義】 わが国における健康教育の動向 第 15 回【講義】 学習のまとめ			
使用教科書 「学習指導要領解説（保健・特別活動）」、「健康教育 ヘルスポモーションの展開」（保健同人社）、「保健室経営計画の手引」（財）日本学校保健会、必要に応じて資料配付する。			
自己学習の内容等アドバイス ・保健の「学習指導要領解説（小・中・高等学校）」の内容及び系統性を理解するとともに、関連教科の内容についても把握しておくこと。 ・現代的な健康課題の現状と課題を把握するために、文部科学省等が出版している各種統計資料や報告書・手引書をよく読んで概要を理解しておくこと。			

[授業科目名] 健康教育学特論Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>健康教育を推進する上で必要な指導計画及び評価方法について理解を深めるとともに、具体的な問題解決型の指導案や教材等を作成し、模擬授業を実施し、さらに再計画をすることでよりよい授業を模索し、実践することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>健康教育学特論Ⅰの授業を踏まえて、学校保健計画等の作成、教科保健及び学級（HR）活動における保健指導の指導案及び教材の作成、模擬授業の実施、学校保健委員会の企画・運営等について実践的な演習を行い、健康教育の手法や技術を習得し実践力及び指導力を高める。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業態度（課題の成果物（指導案、計画、運営案等）） 30% ・ 模擬授業、プレゼン等の評価 40% ・ 授業態度（積極性、発言等） 30% 			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第 1 回【講義】 オリエンテーション 授業の目的、授業内容の概要説明、進め方についての説明</p> <p>第 2 回【講義】 学校保健計画と評価</p> <p>第 3 回【講義】 学校安全計画と計画</p> <p>第 4 回【講義】 食に関する指導</p> <p>第 5 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業① 教科保健の指導案作成</p> <p>第 6 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業②-1 教科保健の模擬授業実施と協議</p> <p>第 7 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業②-2 教科保健の模擬授業実施と協議</p> <p>第 8 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業③ 保健指導の指導案作成</p> <p>第 9 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業④ 保健指導の模擬指導実施と協議</p> <p>第 10 回【演習】 個別の保健指導① 保健指導計画の立て方</p> <p>第 11 回【演習】 個別の保健指導② 指導の実際と評価</p> <p>第 12 回【演習】 児童生徒保健委員会の指導 活動計画および運営方法</p> <p>第 13 回【演習】 学校保健委員会の企画・運営① 議題の選定、企画、運営案、事前活動及び事後措置</p> <p>第 14 回【演習】 学校保健委員会の企画・運営② 運営案の作成とその評価</p> <p>第 15 回【講義】 学習のまとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「学習指導要領解説小・中・高等学校（保健・特別活動）」 ・ 必要に応じて資料配布する。 			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校保健計画の作成及び評価計画の作成、保健室経営計画の作成及び評価計画の作成、教科保健指導案の作成、学級活動における保健指導案の作成、学校保健委員会の計画、運営案の作成、これらについて原案を作成するので、各自でテーマを決めてシミュレーションしておくこと。 ・ 教科保健、学級活動における保健指導の評価計画の作成に当たっては、国立政策研究所の「評価規準作成のための参考資料」を活用すること。 			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校看護学特論		講義	浅野 妙子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 養護教諭は突発的な健康上の問題を抱えた本人とのみ対応するのではなく、関係者（学校職員、担任、管理者、保護者等）との協働・調整・説明と同意をしながら判断し、対応を決定する。けがや事故などの救急事態発生時には、時間の経過とともに求められる救急処置や看護は変化する。医療機関へ搬送するまでの状態ではない場合には特に、学校生活を円滑に過ごせるようにしながら、治癒するまで経過観察、健康支援を行っていることを理解する。			
授業の概要 学校ではさまざまな健康状態にある児童生徒のけがや事故、健康状態の異変に対応している。時には慢性疾患を抱えた児童生徒や医療的ケアが必要な児童生徒の急変に対しても、適切な判断に基づいた救急処置・看護が出来るようにあらかじめアセスメントし、計画を立てて準備、実践へとすすめる。本講座では学校看護学の中の学校救急看護活動について講義する。			
学生に対する評価の方法 授業参加態度（自分の意見を述べる、他者の発表に自分の意見を述べる事が出来る） 20% 中間発表 30% およびレポート 50% により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 学校救急看護/救急処置とは 第2回 学校における救急事例の実態 第3回 救急事例に関わる対象者（傷害・疾病の急変の本人、本人をとりまく、友人、保護者、担任、校長などの管理者、医療関係者等 それぞれの特性・条件） 第4回 救急事例の判断から救急処置・看護、治癒するまでの過程 第5回 救急事例の判断について（事実判断、価値判断など） 第6回 1）（症状が中心） 2）医学的・医事的判断 第7回 3）非医学的・非医事的判断（症状以外のもの 学校生活、経済的、宗教的等） 第8回 4）事例の事実の解釈や問題点を明らかにする（対象者が事実をそれぞれに解釈し、問題点を明らかにする） 第9回 5）問題点から対応を決定（救急車要請、受診、帰宅等、問題点は時系列で変化し対応が変わる） 第10回 6）救急処置から治癒するまで救急処置・看護、保健指導、経過観察をする 第11回 学校救急看護体制（救急処置・看護計画） 1）校内・校外の連絡体制 2）救急薬品や衛生材料、施設・設備の準備 3）現職教育 第12回 学校救急看護とコミュニケーション過程 第13回 学校救急看護とインフォームドコンセント 第14回 学校救急看護と安全教育 第15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 現場での救急事例の判断や対応と専門書に記載されている理論とのズレ・差異について追究する。追求するために必要な文献や資料を受講前に収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。			

[授業科目名] 学校看護学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 浅野 妙子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 看護はあらゆる健康水準の人々を対象によりよい健康状態を目指した看護援助を提供している。 看護活動の場として臨床看護、学校看護、地域看護、産業看護等がある。この演習では児童生徒を対象とした学校看護に焦点をあてながら、傷病予防の観点および傷病で通院しているケース、慢性疾患（アレルギー疾患、心疾患、代謝性疾患等）を抱えているケース、医療的ケアを必要としているケース等さまざまな健康水準の児童生徒を対象とした観点から、順調な成長発達を支援・促進し、学校看護の視点から円滑で成果のみえる看護活動を行っていくことについて学ぶ。			
授業の概要 学校看護における具体的な看護援助の基本となる、「①教える、導く・育てる等保健教育、保健指導」、「②見守る、保護する等傷病のケア」、「③苦痛を和らげ、安楽を与える、それ以上悪化させないよう救急処置を行う」について事例等を通して学修する。			
学生に対する評価の方法 各自分担した項目をまとめ、レポート作成（４０％）に基づいて発表（２０％）を行う。 授業参加態度（４０％）により総合的に評価する			
授業計画（回数ごとの内容等） 第１回 看護の理論や概念について 第２回 学校看護とは、看護の歴史の中の学校看護 第３回 看護・福祉の倫理および学校看護の倫理綱領 第４回 学校看護の援助活動について １）健康の保持増進、傷病の予防的な観点から 第５回 学校看護の援助活動について ２）救急看護活動と安全 第６回 学校看護の援助活動について ３）日常起こりやすい傷病 第７回 学校看護の援助活動について ４）慢性疾患を抱えた児童生徒の看護 第８回 学校看護の援助活動について ５）火災・地震などの災害 第９回 学校看護の援助活動について ６）医療的ケアを必要とする子どもへの援 第１０回 学校看護の援助活動について ７）慢性疾患児へのケア（アレルギー疾患、ぜんそく、心疾患等） 第１１回 基本的看護援助・ケアの技術（１）基本的な看護援助技術 第１２回 基本的看護援助・ケアの技術（２）コミュニケーション、アセスメント技術 第１３回 外傷救急処置援助（１）創傷処置 第１４回 外傷救急処置援助（２）救命処置 第１５回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する			
自己学習の内容等アドバイス さまざまな健康水準の児童生徒の健康課題にどのような援助を行うが、具体的な事例を収集して討論し、養護教諭の養護活動について総合的な判断力と実践力を身につけることを目指す 受講前に必要な文献や資料を収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。 受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。			

[授業科目名] 発達看護学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 浅野 妙子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 看護はその対象者である人を人間生涯発達の視点でとらえている。 本講義では、ライフステージの各期における共通性と特異性を理解して、小児期における人の成長発達および発達段階について学び、対象の理解を深めるとともに、一人一人の個別性と必要とされる看護を通して、学校教育の円滑な実施とその成果の確保に資する発達看護学について探究する。幼児から児童生徒（以下「子ども」とする）を対象に、看護の機能である看護技術、相談的対応機能、教育的対応機能について学修する。			
授業の概要 看護の対象は新生児から高齢者まで幅広い。人はそれぞれの発達段階において、その時期特有の課題を持ち、課題の解決を試み、発達危機を克服しようとしている。看護の役割として重要なものの一つに、その途上において遭遇するさまざまな傷害や疾病等の状況危機の克服と適応を支援することがある。具体的な看護援助の本質は①教える、導く・育てる等保健教育、保健指導 ②見守る、保護する等傷病のケア③ 苦痛を和らげ、安楽を与える、それ以上悪化させないよう救急処置を行う等が挙げられる。ここでは対象を幼児から児童生徒に重点をおき、その発達看護学について学修する。			
学生に対する評価の方法 事前事後レポート（40％） 授業参加態度（40％） プレゼンテーション（20％）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 人のライフサイクル、発達課題 第2回 生涯発達とは 成長発達とは 第3回 対象の発達の視点と評価 1) 形態的・身体的側面 第4回 対象の発達の視点と評価 2) 認知的側面 第5回 対象の発達の視点と評価 3) 心理・社会的側面 第6回 傷病体験から心身面の変化どう認知しているか 第7回 1) 傷病に伴うさまざまな痛み・苦痛をどのように感じ表現しているか 第8回 2) 創傷の体験をどのように認知しているか（年齢別にみる） 第9回 3) 疾病抱えた子どもは自分の心身をどのように認知しているか ① 感染症等日常的な疾患 第10回 ②アレルギー疾患、心疾患等慢性疾患を抱えた子ども 第11回 ③入院を体験した・している子どもは受けた検査や処置・看護をどう捉えているか 第12回 子どもを対象とした看護の役割 成長・発達への支援、家族機能 第13回 個々の子どもの発達に対応した看護の基本的援助技術 1) 基本的な日常生活習慣（感染予防、清潔、排泄、食事など） 第14回 2) 発熱、嘔吐、救急薬品など使い方頭痛・腹痛、気分不良・嘔吐等の症状の看護 第15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 心身ともに成長、発達していく子どもたちを人のライフサイクルの視点から理解し、各ステージにおける発達課題を検討しつつ、学修を進める。 受講前に必要な文献や資料を収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。 受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。			

[授業科目名] 発達看護学演習		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 浅野 妙子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 小児期における人の成長発達および発達課題について学び、一人一人の個別を含めた対象の理解を深めるとともに、成長発達を支援する発達看護の視点から必要とされる看護援助について学ぶ。			
授業の概要 看護の対象は新生児から高齢者まで幅広い。この演習では対象を幼児から児童生徒（以下、子どもとする）までに限定し、子ども達の健康保持増進および順調な成長発達を促すための看護援助について学ぶ。さらに、けがをしたり、急病になったり、慢性疾患を抱えていたり、医療的ケアを必要としたり、入院を余儀なくされる、などの状況にある子ども達の理解と看護援助および支援について考える。これらの状況にある子どもに関連した事例や文献から学び、議論をすすめる。			
学生に対する評価の方法 事前事後レポート（40％）授業参加態度（40％）プレゼンテーション（20％）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1～5回 看護雑誌などの文献から疾病をもった子ども達が疾病についてどのように理解・認知しているか、どのような治療・看護を受けているか明らかにする。 アレルギー疾患・心疾患・糖尿病を持つ子ども、医療的ケアを必要としている子どもなど。同じ疾患でも年齢により、症状によって治療・看護が異なることを理解する。子どもたち自らがどのようなことをしているか明らかにする。 第6～10回 幼稚園、学校にいる子どもを対象に分担して面接を行い、けがをしたり病気になったときの自分の心身の状態、治療の経過をどのように理解・認知しているか明らかにする。 1) 創傷・骨折などの経験がある子ども ＊上記の者を対象に、治癒するまでどのように症状が変わり、どのような処置・看護を受けたか、自分では何をしたら学校生活をおくる上で配慮したことなど治癒するまでの事例を収集する。 2) 慢性疾患を抱えている子ども 1) ＊と同様 3) 幼児から高校生まで同じような病気に（感冒などの感染症）罹患した子どもに発病から治癒するまでの症状の変化、治療の様子等を聞きまとめる。病気の理解、認知や看護したこと・してもらったこと、自分で出来ることなど、発達段階によって異なることを理解する。 第11～13回 文献で明らかになったことをまとめ、情報を共有し検討する。 第14回 発表 第15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて文献・資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 疾病をかかえる子ども等の学校保健・看護文献及び新聞等の記事から発達看護の視点の支援について考えることができるように学修を進める。 受講前に必要な文献や資料を収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。 受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。			

[授業科目名] 養護実践学特論 I		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 遠山 久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 授業のテーマは、「養護教諭とは」「養護教諭の実践とは」を多角的に追求し考察することである。種々の資料の読みとりと批評を通じて、受講者各自の「養護教諭観」を形成することができるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 養護教諭の歴史、「養護教諭の職務」、「養護教諭論」の変遷などに関する資料（成書や公的文書・審議会答申など）を収集し、それらに表れた著者（研究者、実践者、市民）の「養護教諭観」を読みとる。これらの素材の読みとりと討議を通じて、受講者各自の「養護教諭観」を形成する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（10%）、課題レポート（40%）、総括レポート（50%）で総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 【講義】 ガイダンス 授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明 第2回 【講義】 養護の基本原理、養護の目的と機能、教育における養護 第3回 【講義】 養護教諭の専門性（専門性の考え方、養護教諭の存在意義と歴史） 第4回 【講義】 「養護教諭論」の変遷①養護教諭の活動と関連法規 第5回 【講義】 「養護教諭論」の変遷②学校保健の領域構造と養護教諭の活動 第6回 【講義】 「養護教諭論」の変遷③養護教諭の役割・機能 第7回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議①保健室経営 第8回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議②保健管理 第9回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議③保健教育 第10回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議④健康相談 第11回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議⑤保健組織活動 第12回 【演習】 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議①「普遍的養護教諭観」 第13回 【演習】 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議②「時代のニーズに応じた養護教諭観」 第14回 【演習】 課題レポート「私の養護教諭観」発表と討議 第15回 【講義】 まとめ			
使用教科書 必要に応じて参考資料を紹介・配布する			
自己学習の内容等アドバイス 1. 「養護教諭の職務」、「養護教諭論」などの関連資料はできる限り広範囲にわたって収集すること。 2. 関連資料は著者自身が文章化したもののほか、聞き取りなどのオリジナルデータも含める。 3. 事前学習・復習（疑問点・意見等）に1時間程度を充てる。 4. 授業計画は、授業の進行状況により前後することがある。			

[授業科目名] 養護実践学特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 遠山 久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 養護教諭の専門性や果たすべき役割について理解を深め、養護教諭に求められる実践力の向上を図るとともに、学究する姿勢を体得することができる。			
授業の概要 養護実践に関する文献検索・調査研究・レポート発表を行い、養護教諭の職務・専門性や健康課題解決のための養護実践について討議する。その過程で養護教諭に求められる役割について考察を深め、実践力の向上と学究する姿勢を養う。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（10%）及び課題レポート（40%）、総括レポート（50%）で総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 【講義】 ガイダンス 授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明 第2回 【講義】 養護教諭の職務と専門性（歴史的理解・アイデンティティ） 第3回 【演習】 養護教諭の職務と専門性に関する討議 第4回 【講義】 現代的健康課題 第5回 【演習】 健康課題解決のための方策に関する討議 第6回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（保健室経営） 第7回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（保健管理） 第8回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（保健教育） 第9回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（健康相談） 第10回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（保健組織活動） 第11回 【講義】 養護実践の目標と評価（PDCA） 第12回 【講義】 養護教諭と研究（養護実践と実践研究） 第13回 【演習】 養護実践論発表と討議 第14回 【演習】 これからの養護教諭論発表・討議 第15回 【講義】 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 1. 養護実践の事例は、書籍・雑誌等のほか、学会・研究会や地区での実践発表収録等からも収集することが望ましく、できる限り広範囲にわたって収集すること。 2. 事前学習・復習（疑問点・意見等）に1時間程度を充てる。 3. 授業計画は、授業の進行状況により前後することがある。			

[授業科目名] 臨床心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 榊原雅人
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 臨床心理学を学び、児童・生徒をよりよく理解し、彼らの諸問題に取り組めるようになるのが、テーマである。そして、心理学の応用によって、諸問題をよく理解し、より高度な技量を身につけることができるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 臨床心理学のアセスメント法や面接法により、児童・生徒をより理解することが様々な現場で求められている。リラックス法、分析的方法、行動論的方法などさまざまな心理療法の技法を会得し、それらをカウンセリングの中で活用することによって、援助できるように授業を展開する。一方、心身症、精神疾患、不登校、いじめなどの特殊な状態についても対応法などについても学ぶ。また、医療機関や福祉機関との連携などチーム・アプローチについても考える。			
学生に対する評価の方法 毎回の小テスト（60％）とレポート（40％）の成績を基準とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 臨床心理学の基本的発想 第2回 アセスメント（1）知能検査 第3回 アセスメント（2）臨床検査、テストバッテリー 第4回 面接、カウンセリング 第5回 介入（家族、学校、職場） 第6回 ストレス 第7回 心理療法（1）自律訓練法、リラクゼーション 第8回 心理療法（2）精神分析、交流分析 第9回 心理療法（3）行動療法 第10回 心理療法（4）家族療法、その他の治療法、統合的アプローチ 第11回 臨床心理学の対象（1）心身症 第12回 臨床心理学の対象（2）精神疾患、DSM-5、気分障害 第13回 臨床心理学の対象（3）児童・生徒の問題 不登校、いじめ、虐待 第14回 他機関との連携 医療機関、福祉機関 第15回 介入効果に関する文献の抄読			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 次回の講義のテーマを予告するので、予習しておくこと。			

[授業科目名] 臨床心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 榊原雅人
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 臨床心理学を応用して、児童・生徒の問題に取り組む演習をするのがテーマである。現場の諸問題を心理学の活用によって理解できるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 まず、心理教育的アセスメントとは何かについて学び、さまざまなアセスメント方法、例えば、知能テスト、CMIなどの臨床テスト、臨床研究にも活用できるPOMSなどのテストについて習熟する。次に、子どもとの面接法についてその技法を演習する。それについては、ビデオをみたり、テープを聴いたり、視聴覚教材も利用する。それらの仕上げとして模擬面接実習もする。さらに、自律訓練法や交流分析の実際についても学び、コラージュや箱庭も自分で作ってみる。その上で、摂食障害、気分障害、不登校への対応をシミュレートしてみる。			
学生に対する評価の方法 毎回の小テスト（60％）とレポート（40％）の成績を基準とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 心理教育的アセスメントとは 第2回 心理教育的アセスメントの方法 第3回 心理検査の活用 第4回 アセスメント（1）知能検査 第5回 アセスメント（2）CMI、うつ尺度 第6回 アセスメント（3）STAI、POMS（臨床研究への活用） 第7回 アセスメント（4）その他のテスト、心理検査について、テストバッテリー 第8回 面接法 子ども面接 第9回 カウンセリング技法 ビデオ鑑賞、模擬面接 第10回 自律訓練法の実際 第11回 交流分析の実際 第12回 コラージュ・箱庭療法の実習 第13回 摂食障害への対応 第14回 気分障害への対応 第15回 不登校への対応			
使用教科書 特に使用しない。心理テスト用紙や必要な資料は配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回の演習のテーマを予告するので、文献などによって予習しておくこと。			

[授業科目名] 学校心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 浜田 恵
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「学校心理学、特に、チーム学校を学ぶ」をテーマに、学校心理学の基本である心理教育的援助に関する基礎知識及びスクールカウンセラーに関する知識が理解できるようになることを到達目標とする。			
授業の概要 学校教育の中で、一人ひとりの子どもが学習や対人関係、進路指導等で出会う様々な問題を解決するためにどのような援助ができるのか等、子どもの成長を促進する心理教育的援助サービスについて学習する。 問題解決には、子どもを取り巻く教師や保護者などとのチームワークが必要である。授業は、これらを含む心理教育的援助に関する基礎的知識を学習し、事例を通して援助者に関する知識も学習する。			
学生に対する評価の方法 各章が終わるとレポートを提出する（10回）。さらに、その章に関連した先行研究を提供するので、各章のまとめの中に、その先行研究も入れてまとめて提出する。その提出物（70%）と授業活動態度（30%）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（授業の進め方と評価等について説明）。学校心理学と教育について、学校組織の中で学校心理学をどう位置付けていくか現状の子ども達の視点から考える。 第2回 学校心理学の定義と必要性について学ぶ。又、学校心理士資格についての情報を提供する。 第3回 アメリカと日本における学校心理学について日米のスクールサイコロジストについて学ぶ。又、日本における学校心理士の現状についても学ぶ。 第4回 心理教育的援助サービスの基礎概念について、援助サービスの対象（誰を）、焦点（何を）、援助サービスの場（どこで）について学ぶ。 第5回 心理教育的援助を担う4種類のヘルパーについて学ぶ。学校組織の中での養護教諭の役割と心理教育的援助についても学ぶ。 第6回 学生からの体験談発表（ケース研究）。養護教諭やボランティアで体験しているケースについて話し、心理教育援助者としての役割について理解する。 第7回 3段階の心理教育的援助サービスについて、モデルを学び、援助サービスの対象は、すべての子どもであることを理解する。 第8回 スクールカウンセラーに求められる役割について学ぶ。特に、スクールカウンセラーの実践研究を通してスクールカウンセラーに何が求められているかを学ぶ。 第9回 スクールカウンセリングの特徴について、一般のカウンセリングとの違い、面接構造、対象者、目的等の違いについて学ぶ。 第10回 心理教育的アセスメント –心理教育的援助サービスの基盤として一子ども（学習面、心理・社会面、進路面、健康面）と環境（学級、学校、家庭等）、及びその相互作用に焦点をあて、アセスメントの方法について学ぶ。 第11回 スクールカウンセリングの実際 –子どもとの関わり–児童生徒に直接的援助を行うに当たっての関わり方（3種類の関わり）、態度、意識、注意すべき点などについて学ぶ。 第12回 スクールカウンセリングの実際 –保護者とのかかわり–教師として、スクールカウンセラーとして、保護者とどのように関わればいいのか、子どもとの関係を焦点にあてて学ぶ。 第13回 教師、保護者、学校組織へのコンサルテーション–児童生徒へのチーム援助として–援助サービスのコーディネーションについて学ぶ。特にコンサルテーションの意義とプロセスについて学ぶ。 第14回 外部機関との連携について、援助チームの進め方、学校、地域における援助サービスのシステムについて学ぶ。特に、教師、スクールカウンセラー、保護者とのチーム援助について学ぶ。 第15回 学校心理学と現状と課題及び心理教育的援助サービスを行う上での倫理について学ぶ。			
使用教科書 「学校心理学」 石隈利紀著 誠信書房（2009）			
自己学習の内容等アドバイス 予習・復習をして学校心理学についての知識を習得し、自分の仕事の中でどのような援助ができるかを考える力をつけてほしい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学習心理学特論		講義	赤嶺 亜紀
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ <p>この授業では人の学習を支えるしくみや原理を理解できるようになることを目標とする。そして、学校現場での課題、とくに学習に関わる問題への心理教育的援助サービスの実践の素地を養う。</p>			
授業の概要 <p>はじめに学習に関するさまざまな心理学的理論を概説する。そして、それらの知見に基づき、効果的な学習指導のあり方や学習の場として望ましい学級のあり方について、受講者みなで討論する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>評価は主に担当テーマの発表と学期末のレポートに基づくが、平常の授業態度（発言や質疑、討論への参加など）を考慮する。成績評価の配分は、担当テーマの発表 40%、期末レポート 40%、授業時の発言や討論への参加 20%。ただし、この配分は、課題の達成度により若干変更することがある。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第 1 回 導入：学校教育の基盤としての教授・学習心理学 第 2 回 学習の理論 (1)： 学習の行動論的見方 第 3 回 " (2)： 学習の認知論的見方 第 4 回 " (3)： 学習の活動論的見方 第 5 回 記憶と理解 (1)： 記憶のしくみ 第 6 回 " (2)： ワーキングメモリ 第 7 回 " (3)： 概念形成 第 8 回 " (4)： 問題解決 第 9 回 動機づけ (1)： 動機の種類 第 10 回 " (2)： 学習・教育と動機づけ 第 11 回 学習指導と授業 (1)： 学習指導の理論的背景 第 12 回 " (2)： 個人差に応じた指導 第 13 回 学級集団とその組織化 (1)： 学級内の相互作用 第 14 回 " (2)： 学級集団の成立・発展過程 第 15 回 まとめ： 科学的な研究と教育の実践</p> <p>第 11, 12 回 学習指導と授業 第 13, 14 回 学級集団とその組織化 これらのテーマは、学生の担当者が発表する。</p>			
使用教科書 <p>必要に応じて資料を配布する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>学校心理士をめざす学生の参考図書（学校心理士資格認定委員会（編） 「学校心理学ガイドブック」 風間書房など）をよく読んでおく。 例えば CiNii Articles や EBSCOhost などのデータベースを活用して、各回のテーマに関連する文献を入手し、最新の研究動向をとらえる（予習・復習それぞれ 90 分）。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学習心理学演習		演習	赤嶺 亜紀
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ <p>心理教育的アセスメントの実習を通して、知能検査の理論的基盤と検査の尺度構成、標準化検査の意味を理解する。そして、アセスメントに関する多様な能力の基礎を獲得し、現場で実践できるようになることが到達目標である。</p>			
授業の概要 <p>心理教育的アセスメント実習として、個別式知能検査の実施、結果の解釈と指導案の作成を取り上げる。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>3種の課題それぞれについてレポート作成を求める。ここで課すレポートは（学校現場での指導案も同様）科学的報告書であり、事象を客観的、合理的に記述することを重視する。 実習課題はいずれもグループ活動を求めるものであり、各人の積極的な取り組みが不可欠である。成績の評価は、各自のグループ活動への貢献度を考慮する。 成績評価の配分は、3種の課題レポート 60%、授業時の課題への取り組み 20%、期末レポート 20%。ただし、この配分は課題の達成度により若干変更することがある。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第 1回 心理教育的アセスメントの意義 第 2回 課題 1：田中・ビネー知能検査 (1) 検査の特徴（理論的基盤、尺度構成など） 第 3回 // (2) 検査の実施（練習） 第 4回 // (3) 結果の整理・検査報告の作成（受講者による討論を含む） 第 5回 課題 2：ウェクスラー式知能検査 (1) 検査の特徴 第 6回 // (2) WAIS-IV 手続きの理解 ① 第 7回 // (3) WAIS-IV 手続きの理解 ② 第 8回 // (4) WAIS-IV の実施 第 9回 // (5) 結果の整理 第 10回 // (6) 検査報告の作成（受講者による討論を含む） 第 11回 課題 3：K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー (1) 検査の特徴 第 12回 // (2) 検査の実施（練習） 第 13回 // (3) 結果の解釈 第 14回 // (4) 検査報告の作成（受講者による討論を含む） 第 15回 まとめ：効果的な心理教育的アセスメント ※ 可能であれば、幼児・児童を対象に検査（田中ビネーあるいはK-ABC）の実施を試みたい。</p>			
使用教科書 <p>必要に応じて資料を配布する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>例えば CiNii Articles や EBSCOhost などのデータベースを活用して、各回のテーマに関連する文献を入手し、最新の研究動向をとらえる（予習・復習それぞれ 90 分）。 適宜、参考文献を紹介するが、自らの興味にそって自発的に読書することをすすめる。</p>			

[授業科目名] 特別支援教育特論 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉村 匡
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 障害のある幼児児童生徒における教育の歴史と現状並びに障害児・者に対する社会の意識の変化や福祉制度等について、特別支援学校や学級等における具体的な教育内容の事例や映像資料を挙げながら講義並びに討議形式で概観する。 また通常の学級に在籍する発達障害の児童生徒や、成人した発達障害の人達の生きにくさについて、映像資料を用いて、その特性と理解並びに支援の方策について理解を深める。 この講義を通して、心理臨床や保育・教育の現場で出会う機会が多い発達障害について、その子どもと家族への支援について学ぶ。 更に「障害児教育」の歴史や現状を知るとともに、支援のための基礎的な理論・方法と社会制度の変化や関係諸機関との連携の在り方などを包括的に学ぶことをねらいとする。			
授業の概要 特別支援教育における教育実践とその課題について、障害の理解と支援の在り方や方法に焦点を当てて講義・討議を展開する。			
学生に対する評価の方法 評価は、講義への参加・発言（30%）、課題の発表・討議（30%）、レポートの提出（40%—内容とまとめ方）等で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 各回の講義内容についての説明 第 2 回 特別支援教育の理念とは 第 3 回 特別支援教育の歴史について 第 4 回 障害について（ICIDH から ICF へ） 第 5 回 障害のある幼児児童生徒の診断について 第 6 回 ユニヴァーサル・デザイン（UD）の理念と授業のUD化について 第 7 回 実態把握と教育相談の在り方 第 8 回 個別の教育支援計画と個別の指導計画の実際 第 9 回 学校での実践、学校現場での課題解決（事例検討） 第 10 回 就学相談の在り方 第 11 回 小・中学校での実践 第 12 回 高等学校での実践 第 13 回 地域における連携と情報共有について 第 14 回 教職員の専門性の確保について 第 15 回 特別支援教育の意義と展望			
使用教科書 特になし（講義の都度、資料を用意する）			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の講義の終わりに、次回の講義に関する論文・参考図書を紹介するので通読し事前学習とすること。 また講義後は、関心のある内容について論文を検索し口頭で報告すること。 主な参考図書 ① 「発達障害の子どもたち、『みんなと同じ』にならなくていい。」長谷川敦弥作・SB 新書 ② 「読めなくても、書けなくても、勉強したい」井上智・賞子作・ぶどう社 ③ 「発達障害を生きる」NHK スペシャル取材班・集英社 ④ 「働く、ということ」佐藤仙務作・彩図社 ⑤ 「怠けてなんかない!②」品川裕香著・岩崎書店			

[授業科目名] 特別支援教育特論Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 光代
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>特別支援教育の中でも発達障害児教育に焦点を当て、教育理念、教育制度、指導観、指導方法、社会の意識、福祉制度等についての歴史を概観すると共に、指導方法における国内・国外の文献や映像資料を活用した講義並びに討論と発表を通して研究上の今日的課題を考察し、自ら学びを深めることを目的とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>自閉スペクトラム症 (ASD)、学習障害 (LD)、注意欠如多動性障害 (ADHD) などの発達障害の指導方法について、特に教育現場における実践内容や実践課題に注目しながら授業を展開する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>評価は授業への出席率 (30%)、討論を含む授業への貢献度 (30%)、最終レポート (40%) 等で総合的に評価する。</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>第 1 回 ガイダンス (各回の授業内容の説明) 発達障害児教育の歴史① (教育理念・教育制度)</p> <p>第 2 回 発達障害児教育の歴史② (指導観・指導方法)</p> <p>第 3 回 発達障害児教育の歴史③ (社会の意識、福祉制度)</p> <p>第 4 回 ASD の映像資料視聴と文献研究①</p> <p>第 5 回 ASD の指導方法に関する文献研究② (討論・発表)</p> <p>第 6 回 ASD の応用行動分析学による指導方法</p> <p>第 7 回 LD の映像資料視聴と文献研究①</p> <p>第 8 回 LD の指導方法に関する文献研究② (討論・発表)</p> <p>第 9 回 LD (特に発達性ディスレクシア) の指導方法</p> <p>第 10 回 ADHD の映像資料視聴と文献研究①</p> <p>第 11 回 ADHD の指導方法に関する文献研究② (討論・発表)</p> <p>第 12 回 ADHD の支援教材を用いた指導方法</p> <p>第 13 回 事例検討①</p> <p>第 14 回 事例検討②</p> <p>第 15 回 授業のまとめ・レポートの発表</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特になし。適宜資料を配布する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>発達障害とは診断されないが、通常の学級で何らかの困難を抱えている子どもは多い。いわゆるグレーゾーンと呼ばれる子どもは、幼児教育施設においても増加している。新聞記事やニュースに関心をもち、発達障害児への指導方法について関心を高めて欲しい。毎回資料を配布するので、その内容に関連した論文や著書を読み、自分なりのノートを作成し第 14 回で提出してもらうので、特に事後学習を丁寧に積み重ねて欲しい。</p> <p>主な参考図書</p> <p>① 発達障害の原因と発症メカニズム 脳神経科学からみた予防、治療・療育の可能性 黒田洋一郎、木村・黒田純子 河出書房新社</p> <p>② 脳からみた学習 新しい学習科学の誕生 OECD 教育研究革新センター (編著) 小泉英明 (監修) 小山麻紀/徳永優子 明石書房</p> <p>③ APD の理解と支援 小淵千絵・原島恒夫編者 学苑社</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
特別支援教育演習		演習	吉村 匡
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 就学前、小・中学校、高等学校における特別支援教育の現状と課題を整理する。また関係機関との連携の在り方について、事例をもとに考察する。フィールドワークとして視覚・聴覚・肢体不自由・知的特別支援学校の視察を行う。以上のことから、今後特別支援教育が発展するために必要とされる事柄について理解を深めることを目標とする。			
授業の概要 小学校入学前の就学相談を皮切りに、小・中学校や高等学校、特別支援学校における指導や支援の現状を知る。地域連携について困難事例をもとに、各自調査した上で討議する。フィールドワークとして障害種別の特別支援学校を訪問し、そこで行われている障害に応じた指導や支援について学びを深める。			
学生に対する評価の方法 評価は、講義への参加・発言（30%）、課題の発表・討議（30%）、レポートの提出（40%—内容とまとめ方）等で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 特別支援教育の理念と基本的な考え方について 第 2 回 特別支援教育の歴史と、対象とする幼児児童生徒について 第 3・4回 フィールドワーク（愛知県立視覚障害特別支援学校に出向き、実際の指導場面を観察する） 第 5 回 ○ユニヴァーサル・デザイン（UD）が目指すもの、○地域で共に学び共に生きる教育（交流及び共同学習）、○就学前における発達及び学習支援の在り方について 第 6・7回 フィールドワーク（愛知県立聴覚障害特別支援学校に出向き、実際の指導場面を観察する） 第 8 回 ○小・中学校における発達及び学習支援の在り方について、○特別支援教育が対象とする幼児児童生徒の障害の診断と優生思想について 第 9・10回 フィールドワーク（愛知県立の知的障害特別支援学校に出向き、実際の指導場面を観察する） 第 11 回 ○高等学校における特別支援教育の現状と課題について、○特別支援学校・特別支援学級における障害に応じた指導・支援の在り方について 第 12・13回 フィールドワーク（愛知県立の肢体不自由特別支援学校に出向き、実際の指導場面を観察する） 第 14 回 ○地域との連携を視野に入れたケース・スタディ（関係機関との連携①）、○特別支援教育に携わる教職員に求められる専門性について 第 15 回 ○地域との連携を視野に入れたケース・スタディ（関係機関との連携②）、○特別支援教育の発展のために必要な事柄について討議する			
使用教科書 特になし（講義の都度、資料を用意する）。			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の講義の終わりに、次回の講義に関する論文・参考図書を紹介するので通読し事前学習とすること。また講義後は関心のある事柄について論文を検索し口頭で報告する。学校視察の後も感想・課題等を整理して報告すること。 主な参考図書 ① 「自閉症だったわたしへ」 ドナ・ウィリアムズ著・新潮文庫 ② 「怠けてなんかない！」 品川裕香著・岩崎書店 ③ 「発達障害当事者研究」 綾屋紗月・熊谷晋一郎共著・医学書院 ④ 「目の見えない人は世界をどう見ているのか」 伊藤亜沙著・光文社新書 ⑤ 「子どもへのまなざし」 佐々木正美著・福音館書店 ⑥ 「ちゃんと泣ける子に育てよう」 大河原美以著・河出書房新社 ⑦ 「うちの子は字が書けない」 千葉リョウコ著・宇野彰監修・ポプラ社 ⑧ 「自閉症の僕が跳びはねる理由」 東田直樹著・エスコアール			

[授業科目名] 学校教育相談特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 遠山 久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業のテーマは、子どもの発達・人格の成長を促すために、教育相談・生徒指導・キャリア教育においてどのような指導・支援が求められているのかを理解することである。以下の3点を到達目標とする。 (1) 教育相談・生徒指導・キャリア教育の意義と役割について理解する。 (2) 教育相談の基盤となるカウンセリングの基礎知識・技法にやついて理解する。 (3) 教育相談・生徒指導・キャリア教育における課題について理解し、具体的な対応や展開の在り方について考察する。			
授業の概要 教育相談・生徒指導・キャリア教育の役割や教育相談の基盤となるカウンセリングの理論や技法を理解し、子どもと学校を取り巻く様々な課題について具体的な対応を探求するプロセスを通して、これからの教育相談・生徒指導・キャリア教育の在り方を考察する。			
学生に対する評価の方法 随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況（30%）、受講への取り組み姿勢と授業への参加態度（20%）、総括レポート（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション・教育相談・生徒指導・キャリア教育の目標・意義と役割 第2回 キャリア教育の目標・意義と内容 第3回 キャリア教育の具体的な展開 第4回 教育相談の基盤となるカウンセリングの技法 第5回 子どものアセスメント（教師・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー） 第6回 不登校の歴史・実態・タイプ・背景と支援の実際 第7回 いじめ問題の理解と支援・重大事態への対応 第8回 非行問題の理解と対応 第9回 精神疾患と心身症の理解と対応 第10回 配慮が必要な子どもの理解と対応 第11回 児童虐待と教育相談・子どもの貧困と教育相談 第12回 保護者対応・支援の実際 第13回 学校教育相談の現代的課題の理解と対応 ①性の多様性・外傷体験（事件・事故・災害） 第14回 学校教育相談の現代的課題の理解と対応 ②自傷・自殺予防教育・ゲーム障害 第15回 チームで行う教育相談・生徒指導及びキャリア教育に関するまとめ			
使用教科書 高岸幸弘・井出智博・倉岡智子（2018）「これからの教育相談」北樹出版			
自己学習の内容等アドバイス 「生徒指導提要」（文部科学省）を読み、学校教育相談のあり方を理解したり、日頃教育現場で問題となっていることに調べたりしておく。毎授業前後に事前学習・復習（疑問点・意見等）として1時間程度を充てる。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校教育相談演習		演習	遠山 久美子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 本授業のテーマは心理教育的アセスメントの方法や心理検査を活用したアセスメントについて理解し、学校現場でPDCAにより適切な支援ができる実践力を身に付けることである。 以下の3点を到達目標とする。 (1) 心理教育的アセスメントの目的とプロセス・方法を理解する。 (2) 心理検査を活用し、的確なアセスメントの方法を身に付け、児童生徒・保護者対応、学級経営等に生かす。 (3) 教育相談をめぐる今日的課題に対して事例をもとに効果的なアセスメント・支援方法を学ぶ。			
授業の概要 本授業では、心理教育的アセスメントの方法や心理検査を活用し、学校現場で起きやすい今日的事例を通して、その指導・支援方法や問題点を究めていく。			
学生に対する評価の方法 随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況（30%）、受講への取り組み姿勢と授業への参加態度（20%）、総括レポート（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション・自己理解ワーク 第2回 心理教育的アセスメントとは 第3回 心理教育アセスメントの方法① 行動観察・作品を通しての観察・記録書類の検討 第4回 心理教育アセスメントの方法② 聞き取りや面接の基本・模擬面接 第5回 心理検査の活用① 質問紙法・投影法・作業検査法 第6回 心理検査の活用② ウェクスラー知能検査（WISC-IV）の手続き・実施 第7回 心理検査の活用③ ウェクスラー知能検査（WISC-IV）の結果の整理・報告書の作成 第8回 心理検査の活用④ コラージュ・箱庭の実習 第9回 心理検査の活用⑤ 各種検査の限界・問題点・テストバッテリー 第10回 教育評価の意義（診断的評価・形成的評価・総括的評価） 第11回 学級・学校のアセスメント① 教育課題の焦点化・援助資源の把握・分析・組織的対応 第12回 学級・学校のアセスメント② Q-U 第13回 事例① 行動観察等を踏まえて・困り感への支援 第14回 事例② 心理検査の結果を踏まえての支援 第15回 チーム支援（PDCA）・まとめ			
使用教科書 毎講義に配布するテキスト（レジュメ）を使用する。			
自己学習の内容等アドバイス 日頃教育現場で問題となっていることに関心を持ち、調べておく。次回の授業における「キーワード」について調査・理解し、事前学習（1時間程度）を行っておく。復習（疑問点・意見等）にも1時間程度を充てる。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校カウンセリング特論		講義	浜田 恵
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ			
<p>本授業のテーマは、子どもの成長と発達を援助する学校カウンセリングの考え方や技法を理解することである。以下の3点を到達目標とする。</p> <p>(1) 学校カウンセリングやコンサルテーション、コーディネーションの考え方について理解する。</p> <p>(2) 学校カウンセリングやコンサルテーションを実践する上での問題を理解し、その対応について考える。</p> <p>(3) 学校カウンセリングの基礎的な技法について理解する。</p>			
授業の概要			
<p>子どもと学校を取り巻くさまざまな課題、および、学校カウンセリングの理論や実際を理解し、具体的な取り組みを探究するプロセスを通して、これからの学校カウンセリングの在り方を追求する。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況（30%）、受講への取り組み姿勢と授業への参加態度（20%）、試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等）			
<p>第1回 オリエンテーション 社会の変化と学校教育、学校カウンセリングとは</p> <p>第2回 児童生徒を取り巻く諸課題1 不登校、特別支援教育</p> <p>第3回 児童生徒を取り巻く諸課題2 いじめ、自殺・自傷</p> <p>第4回 児童生徒を取り巻く諸課題3 校内暴力、非行、虐待</p> <p>第5回 児童生徒を取り巻く諸課題4 学習に関する問題、ユニバーサルデザイン</p> <p>第6回 子どもの成長と発達1 感覚、認知</p> <p>第7回 子どもの成長と発達2 道徳性、感情</p> <p>第8回 学校カウンセラーの役割とコンサルテーション</p> <p>第9回 コーディネーション チームとしての援助</p> <p>第10回 校内連携・校外連携</p> <p>第11回 家庭との関わり</p> <p>第12回 カウンセリングの基本技法1 「聴く」と「聞く」と「訊く」の違い、受容と共感</p> <p>第13回 カウンセリングの基本技法2 さまざまなサポート、接点</p> <p>第14回 カウンセリングの基本技法3 ソーシャルスキルトレーニング</p> <p>第15回 まとめ</p>			
使用教科書			
<p>本田恵子・植山起佐子・鈴木真理編（2019）「改訂版 包括的スクールカウンセリングの理論と実践：子どもの課題の見立て方とチーム連携のあり方。」 金子書房</p>			
自己学習の内容等アドバイス			
<p>次回の授業における「キーワード」について調査・理解し、必ず事前学習を行っておく。</p> <p>「生徒指導提要」（文部科学省）を読み、学校カウンセリングに対しての姿勢のあり方を理解しておくこと。</p>			

[授業科目名] 学校カウンセリング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 浜田 恵
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業のテーマは、学校カウンセリングの在り方を理解し、実際に実施できる基本的な技法を身につけることである。以下の3点を到達目標とする。 (1) 学校での児童生徒との関わり、および、児童生徒同士の関わりを促進するためのかかわりづくりに関する技法を身につける。 (2) 児童生徒や保護者の話を丁寧に聴くための基本的な傾聴技法を身につける。 (3) カウンセリングのプロセスを理解し、コンサルテーション、コーディネートを含む事例について考えることができるようになる。			
授業の概要 学校カウンセリング、コンサルテーションと学校の連携、学級経営、発達障害やその傾向のある児童生徒へのカウンセリングで必要とされる技術などについて、討議、グループワーク、ロールプレイを通して、理解を深める。			
学生に対する評価の方法 随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況（30%）、受講への取り組み姿勢と授業への参加態度（20%）、試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション カウンセリング・マインド、枠組み 第2回 かかわりづくりに関するグループ実習1：構成的グループエンカウンター理論 第3回 かかわりづくりに関するグループ実習2：構成的グループエンカウンターの実践 第4回 かかわりづくりに関するグループ実習3：友だち作りのための技法（共通の興味を見つける） 第5回 かかわりづくりに関するグループ実習4：友だち作りのための技法（良い会話とは何か） 第6回 かかわりづくりに関するグループ実習5：友だち作りのための技法（会話を始める・終わる） 第7回 傾聴実習1 「聞く」と「聴く」の違い、非言語的の手がかり（ロールプレイ） 第8回 傾聴実習2 質問法・言い換え・繰り返し（ロールプレイ） 第9回 傾聴実習3 はげまし・感情の反応（ロールプレイ） 第10回 傾聴実習4 保護者の対応（ロールプレイ） 第11回 総合実習1 不登校の事例 第12回 総合実習2 感情のコントロール困難に関する事例 第13回 総合実習3 ストレスマネジメントの理解と実践 第14回 総合実習4 学校の危機対応とコンサルテーション、コーディネート 第15回 まとめ			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業における「キーワード」について調査・理解し、必ず事前学習を行っておく。			

[授業科目名] 特別研究		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 指導教員
[単位数] 8	[必修・選択] 必修	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ 修士論文の作成に向けて、関係する論文の読み方、書き方を理解し、各自が設定した研究課題に関する修士論文を作成していく。</p>			
<p>授業の概要 授業は、個別指導とゼミナール形式で行う。個別指導においては、関連する論文を通して論文の読み方、書き方の指導を行う。また、ゼミナールでは各自が自分のテーマと関連した研究論文を検索し発表する。発表後は内容を検討しながら個々の問題を明らかにし、修士論文作成まで指導を行っていく。</p>			
<p>学生に対する評価の方法 研究への取り組み度並びにゼミナールのプレゼンテーション力など総合的に評価を行う。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等） オリエンテーション・個人指導・ゼミナール等を適宜実施していく。</p>			
<p>使用教科書 適宜紹介をしていく</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス 2年間の研究成果が導き出せるよう、積極的に取り組むこと。</p>			